

乳がん診断前の異変調査

「やっぱり顔を合わせるのほうれしいものね」。7月中旬、岡山市の総合病院の一室で、乳がん患者会とあ

けほの岡山」代表の宮本絵実さん(72)らメンバーが再会を喜び合った。新型コロナウイルス感染拡大で3月から活動を控えていた。

この日は月1回の「あけほのハウス」。初めて乳がんを発症した患者が、先輩患者の表情が和らいた。

宮本さんたちが、患者同士の支え合いとともに力を入れてきたのが、乳がんの早期発見を呼びかける啓発活動だ。

県や市町村から声がかかれば、メンバーが出向き、健康作りのボランティアや一般市民に体験を話す。医療機関で定期検診を受け、家でも、

入浴の際や寝る前に乳房を触ってチェックすることを呼びかけてきた。

熱心に耳を傾けてくれる人もいれば、そうでもない人もいる。どうすればもっと多くの人の心に響き、命を守る行動につながるか。

今、新しい試みとして、アンケート「乳がん体験者の振り返り基礎調査」を進めている。ほかの患者会や病院の協力も得た。

アンケートの特徴は、乳がんの診断前にあった心身の変調を詳しく尋ねている点だ。乳房のひきつれや肩こり、だるさ、精神的な落ち込みなど十数項目を確かめる。

ヒントは患者同士のおしやべりにあった。「乳首から液体が出ていた」「やけに落ちこんだ」など心身に起きた異変の話題で何度となく盛り上がった。

「聞き流されていた声を

集めて伝えたい。多くの女性が自分の体に関心を持ち、受診行動につながる情報になれば」と宮本さん。

告知時や、治療中など状況ごとの悩みや不安も把握する。

調査を監修する川崎医大病院(岡山県倉敷市)院長の園尾博司さんは「患者ならではの視点をいかした、きめ細かな内容。診療のサポートになる結果を期待している」と話す。結果は来年夏にまとまる予定だ。

◇

公益財団法人正力厚生会は、読売新聞東京本社からの寄付金などをもとに、全国のがん患者団体への助成事業を行う。講演会や相談会の開催費、ホームページや冊子の制作費などに活用されている。今回は、助成対象となった団体の活動のうち、様々な形で「伝える」取り組みを紹介する。

(このシリーズは全5回)



集まった回答を読む宮本さん(左)らあけほの岡山のメンバー(岡山市で)

過去記事は「ミミドクター」で

連載「医療ルネサンス」は、原則、月曜日から金曜日の掲載です